

研究課題

# プレゼンテーション力の向上で21世紀型学力を身に付ける学習活動に関する研究

副題

～ICT活用で伝える力、思考力・判断力・表現力を育む教育活動～

キーワード

プレゼンテーション, ICT活用, 21世紀型学力, 思考力・判断力・表現力

学校名

古河市立上大野学校

所在地

〒306-0201  
茨城県古河市上大野1425

ホームページ  
アドレス

<http://kamiono.koga.ed.jp/>

## 1. 研究の背景

本校では研究の中心にタブレット端末を利用したプレゼンテーションを据えた。それには2つの理由がある。1つは、自分の考えを聞く人にわかりやすく伝える能力は21世紀を生きる人々には必要な力だと考えたからである。また、本校児童の実態として、授業中に答えが分かっても手を挙げて発表することが少なく、他の場面においても自分を表現することが苦手であるということがあった。2つめは、プレゼンテーション力を磨く段階で、思考力・判断力・表現力が身に付くと考えたからである。この3つの力は、やはりこれからの時代の生きる力として大切である。分かりやすいプレゼンテーションを作成するためには、論理的に考えて資料の組み立てを工夫する必要がある。この段階において思考力が育まれる。情報が氾濫する現在、必要とされる信用できる情報を集めて利用するためには判断力が不可欠である。また、発表の段階では、話し方や目線の置き方、聴衆の反応などに配慮する必要がある、そうしたことに対応していく中で表現力が養われていく。

本校はICT機器の整備状況において恵まれた環境にあった。古河市のモデル校として平成27年9月から全児童に1人一台ずつ、職員用として10台のセルラー式タブレット端末が配備された。また、各学級には、前年度までに大型テレビが整備されておりタブレットと接続して使用することができた。

このようなことからICTを活用してプレゼンテーションに取り組むことで児童が伝える力や思考力・判断力・表現力を身に付けるための実践的な研究として、本研究課題を設定した。

## 2. 研究の目的

研究の目的として以下の3つをあげた。

- (1) プレゼンテーションの指導を行うことで、児童に自分の考えを人に伝える力を付けることができるようになることを検証する。また、その過程において思考力・判断力・表現力が向上することも併せて検証する。
- (2) プレゼンテーションを取り入れた授業のモデルケースとして広く利用されるよう汎用性のある資料や授業記録などを作成・整理して公開する。

- (3) 職員のプレゼンテーションスキルが向上する。教員は授業や研修、研究会等でプレゼンテーションをする機会が増えている。本研究の中でプレゼンテーションのノウハウを学び、以後の授業や研究会等でその力を発揮することができるようにする。

### 3. 研究の経過

表1 研究への取り組みに関する主な経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
2016年 4月11日	パナソニック教育財団事務局及びアドバイザーによる事前訪問	アドバイザーからの指導・助言（実践者）
6月22日	ICTを活用した授業を教員関係者、IT企業社員、新聞記者等に公開	6/27 教育ICT ニュース掲載 7/4 教育家庭新聞掲載
6月27日	アドバイザー訪問・校内授業研究会	研究への指導・助言（アドバイザー）
9月	第1回伝える伝わるアンケート	アンケート調査（児童）
9月26日	平成28年度第1回公開授業研究会	アンケート調査（参加者43名） 研究への指導・助言（アドバイザー）
11月	第2回伝える伝わるアンケート	アンケート調査（児童）
2017年 1月	第3回伝える伝わるアンケート	アンケート調査（児童）
2017年 2月20日	平成28年度第2回公開授業研究会	アンケート調査（参加者100名） 研究への指導・助言（アドバイザー）
6月19日	アドバイザー訪問	研究への指導・助言（アドバイザー）
8月23日	平成29年度第1回公開研究会	アンケート調査（参加者91名）
9月	第4回伝える伝わるアンケート	アンケート調査（児童）
10月14日	日本教育メディア学会全国大会での発表	口頭発表（実践者）
10月28日	第1回プレゼンテーション大会	評価シート（実践者）
11月20日	平成29年度第2回公開研究会	アンケート調査（参加者84名） 授業・研究への指導・助言（アドバイザー）
12月6日	第2回プレゼンテーション大会	評価シート（実践者）
12月	第5回伝える伝わるアンケート	アンケート調査（児童）
12月25日	アドバイザー要請訪問	研究のまとめについて（アドバイザー）
2018年 1月29日	東京オリンピック・パラリンピックのマスコットプレゼン大会	評価シート（実践者）
2月14日	第3回プレゼンテーション大会	評価シート（実践者）
3月13日	第4回プレゼンテーション大会	評価シート（実践者・児童）

#### 4. 代表的な実践

##### 「プレゼンテーション評価シート」の作成

プレゼンテーションをどのように評価したらよいのか、その評価項目と基準を1枚のシートとして作成した。作成にあたっては2017年2月にプレゼンテーションのスキルが向上した6年生に協力を依頼し、項目の洗い出し作業を行った。そしてできあがった原案を職員で協議しながら適切な言葉や基準となるよう修正を加えていった。

このシートには教師用と児童用があり、基本的な内容は同じであるが、児童用は言葉遣いを簡易にしてある。評価シートの内容は教師にとっては児童を指導する際のポイントであり、児童のプレゼンをチェックする際のポイントでもある。児童にとってはよいプレゼンをするために確認すべきポイントになっており、話の組み立てを考える時、資料を作る時、実際にプレゼンをする時に利用されている。

2018年3月現在使用している教師用シートを表2に示すが、これで完璧というものではなく教科や領域によってこれをカスタマイズして使用することが適切であると考えている。たとえば2017年11月に開催した公開授業研究会の際に行った理科の授業では、校外学習で調べて来た川の様子を班ごとにまとめて発表する場面があったが、児童がお互いに評価し合うために、項目を絞り言葉を少し変えて利用した。

表2 プレゼンテーションの評価シート（教師用）

		低学年		評価	中学年		評価	高学年		評価
わかりやすく伝えるための組立	時間(目安)	-1分			-2分			-3分		
	流れ	・伝えたいことを結論・理由の2部構成で話している。		A	・始め・中・終わりの3構成になっている。 ・話がとんだり、ぬけたりしていない。 ・クイズを取り入れている。		A	・起・承・転・結の4部構成になっている。(自分の考えを先に述べたり、始め・中・終わりの3構成でもよい。) ・話に一貫性がある。 ・聞き手を引き付ける工夫をしている。		A
	理由根拠	・適切な理由が述べられている。		B	・理由が分かりやすく述べられている。		B	・理由が客観的に述べられている。 ・キーワードや分かりやすい事例を挙げている。		B
伝えるために必要な資料	資料の種類	・自作の絵または写真を使っている。		A	・インターネットなどからの画像を使っている。		A	・表、グラフを使っている。 ・体験に基づいた資料を使っている。 ・自分で加工した資料を使っている。		A
	資料選び	・5枚・言いたいことがイメージできる資料になっている。		B	・7枚・話の構成に応じた資料になっている。		B	・10枚・聞き手に分かりやすい資料になっている。		B
	1シートの文字数	・必要な文字が入っている。		C	・伝えたいキーワードが入っている。		C	・要約した見出しになっている。		C
相手に伝える話し方	話し方	・はっきり、ゆっくり話している。		A	・声に強弱を付けて、大切なところが分かるように話している。 ・場に応じた言葉づかいをしている。		A	・聞いている人に話しかけるように話している。 ・間を有効に使っている。		A
	態度	・前を見て話している。 ・順序を指で表している。		B	・相手を見て話している。 ・資料の大切なところを指し示している。		B	・相手の反応を見ながら話している。 ・ジェスチャーを交えて話している。		B
伝えたいことが伝わったか		・話し手が伝えたいことがよく伝わったか。		A B C	・話し手が伝えたいことがよく伝わったか。		A B C	・話し手が伝えたいことがよく伝わったか。		A B C

評価方法 ・項目の半分以上がクリアできていたらA、すべてクリアできていなければC評価を記入する。  
・Aが2つ以上あったら合格とする。

この評価シートを、毎朝のスピーチタイムにおいて継続して活用してきた。評価シートを基に、聞き手側はわかりやすい内容だったかという視点でプレゼンテーションを聞き、感想を述べるようにした。教師は、よりわかりやすくなるためのアドバイスを伝えるように努めた。さらに、年間4回のプレゼンテーション大会を始め、始業式や終業式、児童集会において、プレゼンテーションによる発表を行うことで、人前で発表する機会を多くもつようにした。

そして、本校独自の制度であるマスター・オブ・プレゼンテーション (MP) 制度をスタートした。児童

のプレゼンテーションをこの表を使って評価し、基準以上の点をクリアした者にマスター・オブ・プレゼンテーションという称号を与えるものである。校内のプレゼンテーション大会という形でこれまでに4回の発表の機会を設定し42名の児童がMPとして認定されている。MP認定を全校集会で行うことにより、児童のプレゼンテーションへの意欲の持続を図ることができた。児童のプレゼンテーションは回を重ねるごとにレベルが上がってきている。また、第4回の大会では審査員にMP認定された児童も加え、審査の幅を広げている。

## 5. 研究の成果

### (1) 児童の変容

3. 研究経過にあげたように、この2年間、児童の伝える力に関するアンケート調査を定期的に行ってきた。その結果を分析してみると、「発表について」、「資料作成について」、「聞くことについて」の3つの項目で、研究を始めた2016年9月の結果と比べて、2017年12月の結果では向上した項目が多く見られた。その一例として、「自分の意見や考えを発表するときに、伝える相手をきちんと見て言えますか。」の結果が3.1から3.3(4点満点)、「発表するときに、伝える相手を考えて内容を考えますか。」の結果が2.9から3.4に、「友達の発表の仕方や内容について、自分なりの意見や感想をもてますか。」の結果が3.1から3.4に向上した。児童が、自信をもって発表できるようになったこと、相手意識をもって発表するようになったこと、自分なりの意見をもって発表を聞くようになったことが示された。(詳細は別途公表)

以下はこの研究の目標に関連した児童の変容である。

#### ① 児童の「伝える力」の定着

まず、児童の人前での発表における意識が大きく変化した。人前で話すことが苦手だった本校の児童は、大勢の前でも、知らない人の前でも堂々と発表することができるようになった。このことはアンケート調査の結果だけでなく、校内外での様々な場面でのプレゼンテーションにおける本校児童の堂々とした姿から明らかである。こうした変化は、自分の考えを発信する楽しさを感じていることとプレゼンテーションに関する自信の現れであると理解している。

プレゼンテーションの技術的な面でも明らかに進化し、聞く側にとってわかりやすくなっている。使用する資料はどれをどういう順番で使ったらいいかという判断力も備わってきた。また、相手意識も身に付いてきており、高学年の児童が全校児童の前で話す際には、低学年の児童でも理解できるようなイラストなどを工夫して使っている様子も日常的に見られるようになってきた。実際のプレゼンテーションの場面では、話し方、目線、態度などで上達が見られた。上級者になると、ジェスチャーを交えて話したり、聞く側の様子や反応を確認したりしながら話している姿が見られた。

#### ② 思考力の育成

プレゼンテーションを準備する段階で、分かりやすい話の組立を考えること、聞き手の理解を助ける資料を作ることなどを通して、児童は思考力を身に付けてきた。このことについては、シンキングツールを活用したことが大きく影響している。このことで実際にタブレットのプレゼンソフトに向かう前に自分の考えを視覚化することができ、考えを整理することができた。そして、児童は話をどのように組み立てていくかが見通しをもてるようになり、プレゼンテーションの組立がスムーズにできるようになった。このことは、プレゼンテーションの論旨がはっきりしてきたことから見取ることができる。

本校が活用した中で、プレゼンテーションのために有効だった一例は、始めに「コンセプトマップ」で自分の考えを引き出し、次に「フィッシュボーン」で具体的にどんなことを話すかを整理し、最終的に「ステップチャート」で話しの流れを考えるという流れである。また、低学年の児童には、好きなことを数個紹介する内容が多いこともあり、「クラゲチャート」が有効だった。

#### (2) プレゼンテーションの評価基準の作成

4. 代表的な実践例にあげた評価シートがそれである。よいプレゼンテーションとはどのようなものか、それを評価するための観点を低・中・高学年に分けて整理した表を作成した。作成に当たっては、教師だけではなく児童の意見を取り入れることで、児童の相互評価にも使用できるものとなった。この表は本研究の集大成ともいえるものである。しかし完璧なものと考えてはおらず、今後さらにブラッシュアップが必要なものと捉えている。

#### (3) プレゼンテーション型授業のモデルとしての活用

本研究では、プレゼンテーション力を「自分の考えをわかりやすく聞き手に伝える力」として位置付けているため、授業中の単なる発表もプレゼンテーションとして扱ってきた。このため、授業記録シートや公開授業の指導案などは、通常の授業においても参考になり利用してもらえるものと思う。

2年間の研究期間の中で4回の公開研究会を行い、321名の参加者に研究内容を周知することができた。また、視察の受け入れ等で14団体（105名）に対して本校の取組を広めることができた。

さらに、日本教育メディア学会全国大会での研究主任の発表や、プレゼンテーションの全国大会への児童の参加、各種メディアへの掲載などにより、本校の取組が多くの教育関係者に知られることとなった。

#### (4) 職員のスキルアップ

今回の研究を通して、本校の職員はICTのスキルが格段にアップし、自分自身の教育用のツールとしてはもちろん、授業の必需品といえるまで子どもたちの学習用具として使用することに抵抗がなくなった。またその過程において、研修などを通して若手の職員とベテラン職員が交流して得られたものも多い。

さらに、研究会の企画・運営という通常の業務にはない仕事を行う中で、普段使われていない才能を見せたり、能力を向上させたりする様子が見られ、それぞれが一回り成長したと感じられた。

### 6. 今後の課題・展望

まずは研究によって蓄積したデータを整理し今後も利用できるよう保管する作業が必要になる。またその内容の一部は本校のホームページからダウンロードして多くの人々に利用してもらうことがモデル事業の役割であると考えている。

また、研究の柱となったプレゼンテーションの指導は引き続き続けていくが、次年度からはその一歩先として、聞く側の聞く力、応答する力を高める取組をしていきたい。また、プレゼンを受けて話し合う協同的な学習にも力をいれていきたい。

プレゼンテーションのスキルを高めた職員・児童は毎年異動や進学で本校を去っていく。それぞれの行き先で活躍してくれることはモデル事業の拡散という意味で重要である。

### 7. おわりに

こうした研究を進めるにあたっては、一部の職員のみが関わるよりも全校体制で組織的に行う方が望ま

しい。組織的に研究を進めるためには、やはり動きやすく負担が一部に過重にならない組織作りが必要である。組織をうまくつくり適材適所の配置ができれば、組織はある意味自然に動いていく。本校の場合、「研究企画部」「調査・資料研究部」「授業研究部」「環境構成研究部」の4つの組織で研究を進めてきたが、それぞれのチーフが率先して動き、組織的な研究を進めることができた。

21世紀を生きるために必要な力は何なのか、この2年間時々それを考えながら研究を進めてきた。タブレットやPC、さらにはAIができるころは、それらを使って機械にやらせる。これはこれからの時代に仕事の能率を考えたとき必要不可欠なことである。そういう点では小学1年生から自分のタブレットを使って学習している本校の児童は大人になってそう苦勞はしないだろう。しかし、人間には何が求められていくのだろうか。課題を把握し、解決のために資料や情報を集め、思考し、結論を求めていくことは必要であろう。だが、この過程はこれまでに人がやってきたこととそう変わらないことである。また、複数の人が集まり話し合っ、よりよい方法を考えるためのコミュニケーションも欠かせない。これも新しいことではない。ただし、自分の考えをわかりやすく伝える力や相手の意見を理解し応答する力などは、これまで以上に必要となるだろう。特に日本人にはこの点を苦手とする人が多かったように思う。そう考えると、本研究の内容はある程度的を射たものであると少し安心できた。この2年間の取り組みに影響を受けた子ども達が、今後どのように成長していくのか楽しみである。

本研究を進めるにあたり、武蔵大学社会学部教授の中橋雄先生には、研究会や訪問のたびに研究の軌道修正と適切なアドバイスをしていただき、心から感謝申し上げます。また、パナソニック教育財団事務局の方々には研究の進行管理に多大なご支援をいただいたことにお礼を申し上げます。

## 8. 参考文献

- ・寺島浩介他(2013) 『小学校学習指導要領に基づく思考力・表現力育成のための目標リストの開発』 長崎大学教育実践総合センター紀要